白話歐化論議中の三つの類型的理想像

――一九三二年の視點より――

伊藤德也

はじめに

白話の歐化を大々的に主張した最初の文獻は、おそらく傅斯年の《怎樣做白話文》である。書かれたのが一九一八年末。胡適《文學改良芻議》、陳獨秀《文學革命論》が發表された約二年後、雜誌《新青年》が全面的に白話を採用してから一年にも滿たない時點である。以來、白話の歷史的形成には、積極的推進から消極的追認、保守的拒否から攻擊的反對まで實に多樣な歐化論議がついて回った。しかし、言うまでもないことだが、白話の「歐化」とは一體何を指すのか明確な基準があったわけではない。例えば、一方に、「歐化」と言っても一體英語化なのかドイツ語化なのか、やるならエスペラント語化でいくべきだ、といった珍妙な議論があるかと思えば、他方には、「歐化」と言えば中國語のあらゆる語彙・表現をすべて西洋化する主張であるかのようにとって、不安や反感を感じる層が確實に存在したのである。[1]それに加えて、「歐化」という語自體が民族的プライドを逆なでするために、文學の內發的な要求とは無關係なところから議論が出てくることもしばしばあった。從って、議論が議論として實際を離れ、まったくの水掛け論になることさえ少なくなかったのである。それにもかかわらず、この論議が考察に値するのは、なぜ「歐化」（ないしは反「歐化」）を主張するのかを各論者が說明する際の論理に、彼らの抱いていた樣々なあるべき書記言語像（特に白話像）が如實に反映されているからである。その中から說得力と影響力を持った類型的な論理を抽出し、總合すれば、近現代中國の言わば文學言語觀ひいては書記言語觀を、大雜把ながら見渡すことができるだろう。それは「歐化」という補助線を引いてみることによってより鮮明に浮かびあがるはずである。

また、逆に言えば、近現代中國の「歐化」一般に關わる諸問題を考えるうえでも、以上のような言語觀に關する見取り圖は、一定の參考價値を持つであろう。例えば、さらに大きな問題である所謂「民族形式」問題と、ここで扱う白話歐化問題との間にアナロジーが成立することは明らかであるし、その他近代的諸制度導入に際しての論議を考える上でも、有意義な類似性を示唆できぬとは限るまい。

本稿において出發點となるのは、一九三二年の瞿秋白・朱自淸・周作人の三樣の議論である。「五四文學革命」に對する解釋とその後十年間に對する評價を含んだそれらの議論は、對照的な興味深い三つの類型を示している。「一九三二年の視點より」と副題を添えた所以で

ある。尙、默々と進行する文體「歐化」の實際狀況や作家個人の「腕」の問題などは、本稿が注目する各論者の議論自體と無關係ではあり得ないけれども一應は別である。從って「歐化」を語學分析的に問うことや議論と實踐のズレといった問題は、二次的なものとしてひとまず括弧の中に入れ、基本的には觸れないものとする。

一　反歐化の論理(1)——「大衆化」型

瞿秋白は一九三二年の所謂「文藝大衆化」論爭の際、五四式の白話を苛酷にも「新文言」とまで呼んで「文藝大衆化」の名の下にほとんど否定したことがある。「歐化」はその「新文言」を構成する重要な要素の一つとされた。周知のごとく彼の論說は、當時大きな波紋を與えたばかりでなく後世まで深い影響を及ぼしたから、一九三二年という年は白話歐化論議にとっても劃期的な年だったと言うことができる。瞿秋白の議論を少し具體的に見ておこう。

第二、五四式の白話を用いて書くこともできない。五四式の白話は表現形式が複雜である。……〔それには梁啓超式の文言の他に＝引用者注〕所謂直譯式の文章がある。その中に取り込まれた外國語と外國文法は消化されないままであって、ナツメをまるごと飲み込んだようなものである。この二種類の所謂白話はいずれも民衆が採用することはできない。聲を出して讀んだ時同じく理解することができないからである。

——《普洛大衆文藝的現實問題》[3]

しかし、舊小說式の白話には、五四式の新文言と比べて多くの長所がある。五四式の新文言は、中國の文言文法、西洋文法、日本文法、現代白話、そして古代白話を寄せ集めた文體であり、聲を出して讀むことはまったくできない。

——《大衆文藝的問題》[4]

今や飜譯のみならず、一般の歐化文藝と所謂「語體文」にさえこういう〔生きたことばとして口語の中に定着しないという〕病根がある。それらは、こうした〔新しい表現を採用する際の〕無責任な態度のために、中國現代白話文の發展を助けることができないばかりでなく、逆に一種のロバでもないウマでもないラバ言葉、半分文言の非口語的な新文言を作りあげた。

——《再論飜譯——答魯迅》[5]

その他、當時未發表の《歐化文藝》[6]にも同樣の言い方が見える。

ただし子細に讀めば、彼の論說のどこにも白話の歐化を全否定している箇所は見當たらない。つまり、瞿秋白は一概に白話の歐化を敵視していたわけではなくて、例えば、當時發表されなかった力作論文《鬼門關以外的戰爭》[7]の中に次のような箇所があることからも、それは明らかである。

中國語の歐化は許されるし、必要だし、免れようがない。……しかし、それは正確な方法でなければならない。

しかも、魯迅とのやりとりの中で披露した彼の主張の一つ（飜譯を通じて「新たな中國の現代言語を創造する」[8]）は、むしろ瞿秋白が實際は着實な歐化推進者であったことを證明している。[9]だから、彼を單純な白話歐化反對論者としてしまうには問題がある。ただ、あらかじめ斷っておけば、本稿の目的は歐化に對する瞿秋白個人の態度を見極めることではなくて、上にあげたような言說から一人歩きしていった類型的な反歐化の論理を考察することである。壯大なスケールを持つ複雜な瞿秋白の議論全體を、ここで紹介する必要はなかろう。彼の提出した

重要な論點の多くはほとんど深く理解されないまま、上掲のような一部の言説から、「五四式白話」は「新文言」だといった衝撃的な論斷や、「歐化」は反「大衆化」だといった類型的な論理（本稿では「大衆化」型反歐化の論理と呼ぶ）だけが、元來あった微妙なニュアンスを置き去りにして流布していった。[10] しかもそれが大きな影響を及ぼした。そもそも、瞿秋白の議論は五四との斷絶面がとりざたされることが多いけれども、白話問題に關してはむしろ、書記言語特有のルールなどとは無縁の「大衆」という至高の讀者（さらには作者）を想定することによって、暗默のうちに「口語文の理想」という五四文學革命の一精神を繼承・徹底する形をとったと言える。そしてその精神はまったくと言っていいほど誰にも疑われなかった。この點は、瞿秋白の議論の一部が大きな影響力を發揮して一人歩きしていった一つの要因として、注目されてしかるべきであろう。

さて、一九三四年の所謂大衆語論爭になると、白話を否定されるべきものとして「大衆語」と對立させる議論が現れるが、それも「五四式白話＝新文言」説の影響なしには考えられない。「大衆語」の基本理念に理解を示しながらも、大衆語とはまったく別物ではありえないはずの五四白話をどうしても疑うことができなかった論者たちは、五四白話を「新文言」として批判・排撃することは、むしろ文言派に對する武裝解除になってしまう、という論理をしばしば口にした。[11] そうした論調の存在は、逆に「新文言」説の影響の大きさを如實に物語っていよう。一方、以下の如く「大衆化」型論理の影響例にも事缺かない。

まず一九三三年に發表された茅盾の《幾種純文藝的雜誌》[12]の中の一部をあげておこう。彼は、北方左連の機關誌《文學雜誌》第一卷第三期所載の陸綠曦《戰士行》の文體が、あまりに歐化されすぎていることを指摘した後こう批判する。

……この小説全體は「聲を出して讀むことができて、聞いてわかる」という條件に合わない。このような歐化文を《文學雜誌》は決して載せるべきではない。なぜなら《文學雜誌》は「文藝大衆化」に必ず賛成し、しかも「文藝大衆化」を重要な任務とすべきだからだ。

「大衆化」型論理が、左翼作家連盟という組織の規則であるかのような顔をして動き出している。こうして「歐化文」の摘發者として活躍する茅盾も、實はその二、三年前には瞿秋白に向かって、白話の歐化が生んだ「ラバ言葉」は言葉の豊富さ精密さを求める必要性から生まれたのだと「歐化文」を辯護したことがあったらしいし、[13] 後で觸れるように二〇年代には逞しい白話歐化論者でもあった。瞿秋白との出會いは彼が態度を變えるにあたって大きい意味を持ったと言えよう。

翌三四年、左翼非左翼の區別なく廣範な論議を卷き起こした「大衆語」の理念自體も、「大衆化」型論理と無關係ではあり得ない。論爭の眞っ最中に書かれた何家槐（先河）《歐化問題》[14]には次のような箇所がある。

歐化に反對するのは當然だと思う。なぜなら、民衆が理解できるのは、讀むのが難澁な歐化式の白話などではないからである。

「大衆化」型論理の見本のような例である。この文章は當時《申報・自由談》において交わされていた集中的な白話歐化論議の中の一文だが、この時の論議の引き金となったのは、魯迅が comprado（買辯の意）の音譯「康伯度」を筆名にして書いた《玩笑只當他玩笑（上）》[15]である。文中で魯迅が、精密さを追求するために白話の歐化は必要であ

ると主張したため、すぐさま反論を招き、それに魯迅が丁寧に應えたものの、さらに數人からの賛否兩論の議論を集めることになったのである。上掲の何家槐《歐化問題》も魯迅に對する直接的な反駁である。論爭の背景にあったのは言うまでもなく「大衆語」の理念をめぐる矛盾であるが、それも主に「大衆化」型論理に對する態度の相違だったと言えよう。「大衆語」論爭自體にさほど積極的ではなかった魯迅も、この際明確な論理を對置させる必要に迫られ、少しあとに書いた《門外文談》の中で「民衆は知識人が想像するほど愚かではない」(《門外文談》第一一節)という論理を示して、「大衆化」型の反歐化論をきっぱりと退ける。新たな國粹派とか「民衆」の大鼓持ちとかにならぬようにと警告することも魯迅は忘れていない。[17]

さて、論議の中身を見ると、反歐化の旗幟を鮮明にした何化魯《歐化與大衆語》が、「大衆化」型論理を展開するのみではなく、《西廂記》の一部を例として引用し歐化の手を借りなくとも微妙で精密な表現は可能なのだと反論するなど、[18]「大衆化」型論理が複雑かつ具體的な議論を伴うようになってきている。またそれとは別に、排外主義や文化的保守主義のいわば意匠として活用される例もある。例えば、魯迅の《玩笑只當他玩笑(上)》に眞先に反論した文砥(文公直)《中國語法需要歐化嗎》は「漢奸」「買辯心理」「帝國主義の使い」といった煽情的なことばを亂發して、魯迅の歐化必要說を「文化的毒ガス」と呼ぶなど、ほとんど無邪氣なまでの排外主義的發想を露呈しているが、文中に突然「大衆語」が出てくる。

陳子展氏が提唱した「大衆語」は當然の道理だ。中國人の間では中國語を話すべし。これは絶對だ。それなのに貴方は歐化文法は必要だなどとおっしゃる![19]

皮相な排外主義が「大衆語」とか「民衆」といったカードを切り札として取り込んでいくさまがよくわかる。次に、大分時期は飛ぶが一九五一年に老舍が書いた《怎樣寫通俗文藝》[20]の歐化批判を見よう。

たとえ彼ら〔五四の「傳統」にしがみついている人々〕に筆調を改めて、分かりやすくはっきりと書くように勸めても、彼らはやろうとしない。使い慣れた歐化文法と新しい名詞はすばらしいものであって、手放すのは難しいと考えているのだ。しかし、《水滸傳》や《紅樓夢》のような偉大な作品の中には歐化文法や新しい名詞がなく、それでもやはり偉大であるということを彼らは忘れている。おそらく、彼らはまだいくらか外國崇拜病にかかっていて、外國のものは良くて、國産のものは良くないと考えているのだろう。……

我々は自分の顏つきを愛するように、自分のことばを愛すべきだ。自分達のことばを熱愛しさえすれば、我々は人民に學び、人民のことばでものを書くだろうし、それを光榮と感じるだろう。これは單なることばの運用の問題ではなく、基本的には思想の問題——我々のことばを愛するか愛さないか、重視するか重視しないかという問題だ。

前半分は、歐化とは無緣のすぐれた文學作品が存在することを說くという、前掲の何化魯《歐化與大衆語》同樣の論法である。後半分には「人民」が持ち出されているけれども、「自分達のことば」「我々のことば」という言い方からして、どうも保守的文化ナショナリズムの手の込んだ意匠といったニュアンスが殘る。作家老舍は、歐化語法にほとんど頼らぬ北京土語の絶妙な使い手として希有な成功を收めていただけに、こんな議論も强い說得力をもって讀む者に迫ったかもしれな

い。ましてやこの頃はまだ朝鮮戰爭の興奮さめやらぬ時期でもある。

最後に興味深い例をもうひとつあげておこう。時期は四〇年代に戻る。五四文學革命以來新文學側から舊小說派として口を極めて罵られてきた感さえある張恨水が、一九四四年の《總答謝——並自我檢討》[21]の中で次のように書いている。

章回小說は全部が全部破棄すべきものではないと思う。でなければ《紅樓夢》《水滸傳》がどうして世界の名著になるのだろうか。むろん章回小說には缺點がある。だがその缺點も救いようがないわけではない（救うのはむろん私ではない）。一方、新派の小說は一切が進步的であっても、その文法組織は、中國書を讀み慣れ中國のことばを話す普通の民衆の受入れられるようなものではない。……こうした人々を捨て去る理由はないし、西洋文法の組織で書かれた文を、無理に彼らの頭の中に流し込むこともできない。

「普通の民衆の受入れられるようなものではない」「西洋文法の組織で書かれた文」とは言うまでもなく廣い意味での歐化文體のことである。「大衆化」型の反歐化の論理が、見事に舊派小說辯護の論理として取り込まれているのがわかろう。舊小說全般を盲目的に排擊し得た五四時期とは違って、すでに四〇年代は《紅樓夢》や《水滸傳》などの舊小說に對する高い評價が一般に定着していたし、五四以來張恨水らの通俗小說も新文學の影響を受けて大きな變貌を遂げていたから、このような事態が起きるための條件は十分そろっていた。四〇年代における所謂通俗文學派の位置を考える上でも極めて示唆に富む例と言えよう。

以上、白話歐化論議における「大衆化」型論理を概觀してきたが、その例はバリエーションを含めればほとんど枚擧にいとまがない。とはいえ、反歐化論が必ずしも「大衆化」型論理のみを武器にしたわけではない。歐化論の狀況を詳しく述べる前に、「大衆化」型以外の反歐化の論理に觸れておく。

二　反歐化の論理(2)——「活現」型

瞿秋白の「文藝大衆化」論に對して、すぐさま多くの左翼の論者が反應し、文學雜誌上を大いに賑わせたが、白話歐化の問題に關しては一向に進展が見られなかった。目についたのは、茅盾が瞿秋白《大衆文藝的問題》に對する反駁（《問題中的大衆文藝》）の中で、歐化成分などを排除していく必要はあるものの目下のところは瞿秋白の所謂「新文言」を使わざるを得ない、と斷言したことぐらいである。ただし、當時發表されず、從って「文藝大衆化」論爭集の類には收められなかったもので、注目すべき一文が他に殘されている。朱自清の《論白話——讀〈南北極〉與〈小彼得〉的感想》[22]がそれである。內容からして明らかに「文藝大衆化」論爭に應えて書かれたものと知れる。しかも五四白話を眞正面から論じている。

その中には次のような論評がある。

最近宋陽〔瞿秋白〕氏が《文學月報》で「大衆文藝の問題」を提起し、多くの討論を引き起こした。「どんなことばで書くか」という點において、宋陽氏は「最も平易な新興階級の共通語」を使うこと、そしてそれは「また官僚的な所謂「國語」ではない」ということを主張した。ところが、止敬〔茅盾〕氏は同雜誌第二期でそういう共通語は「まだ文學の描寫に使うには不足だ」と指摘した。また寒生〔陽翰笙〕氏は《北斗》雜誌上で「民衆が日常話している絕對的な白話」を使うこと、そしてそれは「大多數の勞

働者大衆が話す共通語」であることを主張した。[24] しかし、こういう大多數の勞働者大衆の共通語など、實際は存在しない。……實のところ國語の區域は廣い。國語は大多數の勞働者大衆が話す共通語ではないとはいえ、さほど違うわけではないし、しかも表現が比較的豊富で實用にたえる。止敬氏が「まだ現在通用している白話を使わざるを得ない」と主張したのはこのためだ。だが、國語標準音に北京音を採用したのと同じように、生きた北京語を極力採用していいと私は思う。

北京語中心主義もそうだが、「大多數の勞働者大衆が話す共通語」や「國語」に對する彼の態度は、瞿秋白の論調と根本的に相いれないものである。それは、教條と彈壓の板挟みの中で命からがら活動している瞿と、五四以來の「國語」整備のための様々な努力を身近で見てきた朱との間の、立場の違いを反映していよう。だからといって、兩者の言語觀・白話觀そのものが、比較の餘地さえないまったくの別物であり得るわけではない。

この《論白話》は、胡適が提出して有名になった五四文學革命のスローガンの一つ（文言は死んだことば、白話は生きたことば）を持ち出して、現在の白話が大多數の中國人の口語を反映していないこと、「生きたことば」でないことを批判する。そして、周作人が創出した「歐化體」を論評するところで、歐化された白話の口調の惡さをあげつらい、副題にあげた穆時英の〈南北極〉と張天翼の〈小彼得〉を、歐化の痕跡がほとんど殘っていない作品集として高く評價する。[25] 明言は避けているが、つまるところこの議論の根底には、口語を極力反映させることがあるべき書記言語の必須の條件だとする發想がある。歐化文體はその口調の惡さが口語からの乖離——「口語文の理想」に對する背離——を證明しているというのである。その點、同様に「生きたことば」であるべきことをしばしば强調する瞿秋白と大差はない。[26] また、本稿で詳しくは觸れないが、歐化を一概に排擊するわけではないところもよく似ている。[27] しかしながら、朱自清は瞿秋白の議論特に「大衆化」型論理に見られるように、反歐化の切り札として「大衆」というものを持って來るのでは決してない。彼は二〇年代初頭に「民衆文學」のあり方という形で「文藝大衆化」と同様の課題に直面しており、その際すでに確固とした結論を出していた。文學の「向上」は「民衆」の名のもとに必ずしも否定されるべきではないというのが彼の立場だったと言えるならば、[28] 三〇年代の彼の白話歐化批判の論理は、「民衆」のための論理というよりは、言わば文學の「向上」のための論理に他ならなかった。そうして彼が積極的に歐化と對置させたのは、碎いて言えば、「口語」の持つ活き活きとした自然な躍動感といったもの、つまり生の口語の中に見出した一種の美であった。口語の美しさを活き活きと再現することと、文體の歐化とは如何にも折り合わない。このような反歐化の論理を以下「活現」型論理と呼ぶとして、そのあたりを朱自清の例に卽して確認しておこう。

《南北極》と《小彼得》の二冊は極力生きた北京語を用いており、聲に出して讀んでみると活き活きとした生氣が感じられる。

——前掲《論白話》

〔話しことばの〕行く雲流れる水の如き自然さは、決して文章の及ぶところではない。

——《說話》[29]

他に彼は、全編北京語の獨白體で書かれた李健吾の作品を絶賛する餘り、その批評文である《給「一個兵和他的老婆」的作者——李健吾先生》[30]を、李の文體に倣って書いているし、「文藝大衆化」論爭の少し

あと、従っておそらく《論白話》を書いた前後に、亡妻の追悼文《給亡婦》を「歐化されていない口語で」書き綴り、あとでその朗讀を披露したりしている。[31] そして白話の過度な歐化に對する直接的懸念・憂慮は、《文言白話雜論》、《論朗讀》、《誦讀教學》、《誦讀教學與「文學的國語」》などに見られる。[32] 特に《論朗讀》では、意味をないがしろにしかねぬ古典詩文の音樂性に批判的な態度を示しながらも、朗讀に對するひとかたならぬ執着を行間ににじませている。こうした「音聲」を主とした人間の身體的リズムへの志向は、朱自清の「活現」型論理を背後からがっちりと支えていたであろう。

以上、朱自清の反歐化の論理を見てきた。一般に「活現」型論理は反歐化論に限らず、生の口語の美に注目する議論の中に見受けられることが多いが、[33] それでも「大衆化」型に比べると壓倒的に例は少ない。文人の胸中の密かな實感としてはともかく、類型的な反歐化の論理として影響力が大きかったとはあるいは言えないかもしれない。しかしながら、「活現」型の論理は、あるべき書記言語を模索していく際、政治的な思想に寄り掛からない、文學表現そのものに固執したほとんど唯一の反歐化の論理として、やはり無視するわけにはいくまい。また、人間の身體的リズムに執着する方向性の、近現代中國における運命を考察する上でも、注目に値する一事例と言えよう。

三　歐化の論理——「內面」型

朱自清が「歐化體」の創始者として名をあげた周作人は、一九二〇年代において白話歐化論者の守護神のように目されていた。例えば傅斯年の《怎樣做白話文》[34] の締めくくりの部分には次のような箇所がある。

《新青年》誌上の文、例えば周作人氏が譯した小說などは極めて優れている。その直譯の筆法は、飜譯の正道であるだけでなく、我々が自分で文章を書く時の手本でもある。

他にも朱光潛や劉半農の證言があるから、[35] 朱自清の說の妥當性は容易に確認できる。そんな周作人は一體どのような白話像を抱いていたのだろうか。

時はやはり一九三二年、彼は《中國新文學的源流》を發表している。[36] 二千年にわたる中國文學史を、卽興・個人主義的「言志」と敎條・集團主義的「載道」の起伏消長として說明したうえで、[37] 五四新文學を明末の公安・竟陵派以來の「言志」の復興としてとらえなおすというのが、「新文學の源流」という題名の內容である。さてその最後の方に、彼獨自の「言志」論を展開しながら現在なぜ白話を使うのかを解說する箇所がある。彼は自說を展開する前に、本稿前節で觸れた「白話は生きたことば」という胡適のスローガンに言及し、次のように言う。

「「二桃殺三士」[38] というのは」白話であって古文ではないと思います。例えば私たちが話をする時、「二桃」でいいわけで、必ずしも「兩個桃子」と言う必要はありません。

彼の議論はそして、「月」は甲骨文字にもある古字だが決して「死んだ」とは言えぬ、といった文字レベルの話に終始する。そこには、朱自清のように「大多數の中國人の」「口語」をことばの死活の基準に置くといった氣配は微塵もない。

一方、「話すように書く」という五四文學革命のもう一つの有名なスローガンを次のようなところで引き合いに出す。

私たちが文章を書くのは、私たちの思想・感情を表現したいから

です。思想と感情を少しでも多く書き表すことができれば、それだけ文章の藝術的分子が増えるわけで、それが多ければ多いほどいいわけです。……私たちの思想・感情を、できるかぎり書き表そうとするなら、最良の方法は胡適之氏が言われたように「話すように書く」ことです。

この時「話すように書く」ことは言わば一つの手段にすぎない。書き手の「內面」を既成の形式の拘束から離れて表現する、ちょうど氣の合った友人と語らう時のように自由かつ存分に自己の「思想・感情」を表現した文章を書く。それがそのまま周作人の「言志」論の主張でもある。從って、この時周作人が五四文學革命の理想の彼方に見ていたのは、「口語」そのものを極力反映させた「口語文」などではなくて、むしろ書き手の「內面」を存分に表現し得る文章語だった。そのためにこそ白話も、また白話の歐化も必要とされたのである（これを今假に「內面」型歐化の論理と呼んでおく）。裏を返せば、當時彼が表現しようとした「思想・感情」（「內面」）と、中國における既成の文章との間には、著しい疎隔があったということになろう。そんな疎隔が、この時代の表現者における「表現」と「意識」の先端的な關係のあり方を、鮮明に特徴づけていたことは言うまでもあるまい。

さて、次に白話歐化の論理の實際を確認しておこう。ここでは歐化論が最もさかんだった二〇年代前半に焦點を絞る。まず周作人から。

私の主張は、單音の漢字の本質に卽して最大限可能な限り歐化を受け入れ、表現力を增加させるということである。しかし、できないことについては無理强いもしない。……「三株們的紅們的牡丹花們」というところまでいく必要はない。屈折語の語尾變化は便利ではあるけれども、中國語の能力を越える。

——《國粹與歐化》[39]

能力の範圍內で極力深刻・複雜なものにして、一切の高尙で精緻な感情と思想を表現するに足る藝術・學問の工具にし、一方で最大多數の國民にその國語を理解、運用させ、各々相應の事業をなすことができるようにする、というのが我々の國語に對する希望である。

……最も重要なのはやはり語法の嚴密化にある。……この件は普通國語の歐化問題と呼ばれていて、近年一部の人の間で討論を引き起した。具體的な結論は得られなかったが、大抵みなこの運動の必要性を感じている。……今言っているところの歐化とは實は、國語の性質に基づいて語法組織を嚴密にし、さらに意味を明瞭かつ適切にして、實用に適ったものにするということにすぎない。

——《國語改造的意見》[40]

（この時点で白話の歐化が「語法組織の嚴密化」と換言されるから次の一節も事實上白話歐化論の一種にほかならない）

「口頭語に對して」文章語は文章を書くのに使われ、相當敎養のある人に理解される。それは言うまでもなく全く口語を基本とするのではあるが、語彙はより豊富で、文法組織はより精密である。複雜な思想・感情を表現するのは、一般の日用口語には荷が重い。

——《國語文學談》[41]

「語法組織の嚴密化」や語彙力の增强という主張も、白話歐化論を見ていく上でのポイントである。それらは「複雜な思想・感情を表現する」ために必要なのである。

周作人以外では例えば鄭振鐸の《語體文歐化之我觀（一）》[42]が、白話歐化論を主張する理由を次のように言っている。

多くのすぐれた思想や情緒がみな舊文體の規範に拘束されて、充分に精緻に表現され得ない。それは文言文だけではなく、語體文〔白話〕さえそうである。

周作人のと同樣、表現されるべき「內面」とそれを表しえぬ旣成の文體、という構圖があるのがわかろう。さて、この鄭振鐸の短文が一九二一年六月の《小說月報》第一二卷第六號に茅盾（雁冰）《語體文歐化之我觀（一）》とペアで掲載されると、それをかわきりに主に《小說月報》誌上で一年以上にわたって白話歐化論議が交わされることになる。[43] 周作人が上掲の文章の中で「近年一部の人の間で討論を引き起した」と言っていたのは、この組織的かつ集中的な白話歐化論議のことを指して言っていたのである。そもそも茅盾と鄭振鐸がこの討論を呼び掛けたのには明確な動機があったのだが、それは例えば《小說月報》第一二卷第七號の〝最後一頁〟の欄の次のような箇所から窺える。

多くの方がお忙しいところ、しばしば語體文の歐化に反對する手紙をお寄せ下さるので、私共は皆樣に討論していただきたいと考えています。

茅盾（沈雁冰）《「語體文歐化」答凍蘅君》[44] の中にもこうある。

現在こうした文章〔歐化文〕を讀むのに慣れていない人が多く、直接反對を表明した言論をよく耳にする。だから私は討論の必要があると考えたのだ。

劇的なまでに進行する白話歐化の實情に對して巷には强い不滿があって、それに對處する必要に迫られたというのが直接的な動機だったのである。ただし、討論を呼び掛けた茅盾、鄭振鐸ら自身が、同時に白話歐化は必要だとする見解を表明しているし、討論の冒頭には周作人の編者宛書簡を置くといった具合だ[45]から、彼らが討論を呼び掛けた意圖はあまりにも明白である。つまるところ、三〇年代以降糾彈されることが多くなる白話の歐化は、文學革命後十年來妥協的・個別的に進行したというよりは、ごく初期からすでに意識的・組織的に推進されたと言うべきなのである。從って、「口語文」の理想を漠然と根本理念としていたはずの白話運動は、むしろその理想とは本來相いれない要素を意識的に取り入れることによって進められたと言って言えなくはない。

最も詳細で周到な二つの歐化論、つまり上掲の傅斯年《怎樣做白話文》と周作人の《國語改造的意見》は、奇しくもこの時期の論議の先驅けと締めくくりの位置におかれる。兩者は共に白話歐化の必要性に觸れる前に、明清小說（《紅樓夢》、《水滸傳》を代表とする）の舊白話文と口頭語を引き合いに出して、思想・感情を複雜かつ緻密に表現する道具としてそれらが十分ではないことを訴える（上掲の鄭振鐸の短文もその意味では「語體文」をも「文言文」と同等扱いしている）。他の大部分の歐化論者は特別理屈なしですませているけれども、自覺の有無にかかわらず、やはりこの二つに對する不滿あるいは不信を前提にしていたと考えるのが道理だろう。すでに見てきたように、三〇年代以降の反歐化論は往々にしてこの二つに對する見直しを强く求めていく。

とはいえ、「大衆化」型論理の二〇年代版とでもいうべき歐化反對論がすでに當時の論議の中に現れていることはやはり見過ごせない。

私は雁冰〔茅盾〕先生が民衆の文學を主張し、文學は私人・貴族のものではないとおっしゃるのに感服しています。……しかし彼ら〔中等階級の人〕にとって歐化された白話は讀んでも理解ができません。……もし、文學の鑑賞が標準以上の人だけに限られる

のではないならば、こういう低能な鑑賞者も顧みられるべきです！[46]

「低能な鑑賞者」、「中等階級の人」という言い方があるだけで、「大衆」という語は無論使われていないし、背後に廣範な組織的運動があったわけでもない。論調は排他的でも攻撃的でもない。しかし、類型としては三〇年代の「大衆化」型論理そのものである。白話歐化問題の構造はそうそう變化していないのである。茅盾がそれに對して、次のように答えているのも興味深い。

現在「英文」を讀んだことのない一般の人にとって、「新式白話文」は讀んでも理解できないというのがおそらく實際の狀況でしょう。しかし、最大の困難は「新式白話文」がわからない點にあるのではなく、「新式白話文」の中の意味がわからない點にあるのだと私は思います。……今の「新式白話文」の小說は以前の小說と非常に違うので當然「無味乾燥」に感じられるでしょう。また、民衆文學と言っても決して民衆がわかるということを唯一の條件にするものではありません。

ここで「わからなさ」の原因を表面的な文體ではなくて「中の意味」に求めている茅盾は、一九三二年、「五四式白話」を排擊する瞿秋白に對して文字・文體の問題はむしろ枝葉末節だと公然と切り返した茅盾を、[47]髣髴として思い起こさせる。茅盾のこの一貫した態度は、歐化に對する彼の立場の變更（推進から反對へ）と、無論矛盾するわけではなくて、巨視的に言えば、周作人が既成の文體に對して「思想・感情」（「內面」）を優先させたのとよく對應している。茅盾は、二〇年代に歐化推進論を主張した際、周作人の强調したような「言志」說風の理由を示したわけではなくて、「語法の改造」が必要だから、と言うに止めているが、周作人も「語法の嚴密化」が「歐化」ということの實際の意味だと明言しているわけだから、兩者の認識の共通性ははっきりしている。いずれもその根幹には「中の意味」（「內面」）と既成の文體との間の危機的な疎隔があったのである。ただ、少し付け加えておけば、二〇年代茅盾の歐化の論理は、第一節で簡單に觸れた三〇年代魯迅の歐化の論理（精密さの追求）同樣、周作人の歐化の論理から「言志」說の自己表現論的色彩を拂拭した形だったと言うことができるだろう。

四　結　び

一九二八年一一月に周作人が書いた《「燕知草」跋》[48]には次のような一節がある。

私も純粹口語體の文章が、新式の中學教育を受けた學生の手中で極めて緻密かつ流麗に書かれているのを見て、新文體が創造されるかもしれない、そしてそれは小說・戲曲に新たな發展をもたらすかもしれない、とは思う。しかし、論文――いや、小品文と言った方がよかろうか、說理・敍事を專らとするのではない、抒情を主としたもの、ある人が「絮語（くだくだしい話）」と稱したことのある、あの種の散文においては、澁味と單純さがあってこそ讀むに耐えるのだから、さらに變化をつけなければならないと思う。口語を基本とし、そこに歐化されたことば、古文、方言などの分子をこね合わせ取り混ぜて適當にあるいは吝嗇に配置し、知識と趣味で二重に統制すると、上品な俗語文をつくりだすことができる。上品と言っても自然で鷹揚な態度のことを言っているに過ぎなくて……

まず注目したいのは、それまで書記言語一般のあるべき條件を提議してきた周作人が、ここでは特に小品文だけに範圍を限定して理想を語っている點である。一部に「歐化されたことば」を積極的に採用する姿勢が窺えるけれども、以前の「語法の嚴密化」といった言い方は見られず、「澁味と單純さ」とか「自然で鷹揚な態度」といったものが强調されている。このことは新文學としての「小品文」が、この時期、他のジャンルよりも先にある程度成熟していたことを示唆している。そして周作人はこの時、大部分の白話論議が暗默の內に小說の文體を想定してそれを曖昧に全ジャンルにまで及ぼすのとは對照的な地點に至っていたと言えよう。もう一つ注目したいのは、五四時期の教育制度改革後の「新式の中學教育を受けた學生」の文體と、それに觸發された「新文體」創造の可能性に彼が言及していることである。科擧用の舊式教育を受け、白話を書くよりも古文を書く方がはるかに容易だと訴える周作人に[49]とって、「新式の中學教育を受けた學生」の「極めて緻密かつ流麗」な「純粹口語體」の出現は、二八年以前に當然豫想されたことだったとしても、彼の書記言語觀に强烈な影響を與えなかったはずはない。この文章以降、彼は白話特に白話歐化問題に關する積極的な提議をほとんどやめるが、その一因はここにあると考えられる。

この周作人の例に象徵されるように、二〇年代末から三〇年代始めにかけて、「五四」以來の新文學・白話運動は一つの曲がり角を迎えていた。「五四新文學」の十年間に對する一連の反省、回顧あるいは總括の動きがこの時期に特に數多く見られるのもそのためである。その中に上掲の瞿秋白・朱自清・周作人の三樣の議論もあった。それらはいずれも、「話すように書く」とか「生きたことば」といったスローガンに代表される五四文學革命の文體精神を繼承（あるいは徹底）せんとする論理を含んでいた。ただし、反歐化の方の二類型と歐化の方の一類型とでは五四文學革命の文體精神に對する解釋が根本的に異なっていた。つまり、前者が概ね理想の彼方に想定していた文體は、いわば口頭語の音を寫す「口語文」なのに對して、後者のそれは「思想・感情」や「意味」（內面）を十全に表現する文章語であった。それは「話すように書く」というスローガンの受け取り方の分岐によく現れている。いずれも現實には純粹な形で存在しないとは言え、「歐化」問題を介した時、この兩者の間の矛盾は決定的なものとなるだろう。また、「國語」（「國家語」ないしは「民族國家語」または「國民語」）を介した時には、更に深刻で複雜な矛盾が露となる。例えば、周作人のような文體精神と「國語」との間にはほとんど緊張關係がなかったけれども、一方、朱自清が三二年の時點で「口語文の理想」も「國語」の理念も同時に維持できたのは、言わば北京語以外の「口語」の抑壓をやむなしとしたからであるし、瞿秋白が「國語」を攻擊したのは「口語文の理想」をより純粹に徹底させたからであろう。かつて「口語文の理想」とは、ラテン語の世界からヨーロッパの各「國語」が分離・獨立するためのイデオロギーであったのだろうが、文言文の世界（＝舊王朝）を分割せずにそのまま引き繼いだ近代中國（「中華民國」・「中華人民共和國」）において、そんな作用を果たすことはなかったようである。それはさておき、上述のような矛盾が極めて激しい形で一擧に吹き出した感のある、三〇年代始めの知識人の困惑は想像するに餘りある。まさにその時期を隔てて、白話歐化論議の大勢は、歐化から反ないしは非歐化へと流れていく。指導的な役割を擔った人物だけを見ても、茅盾がすでに觸れたように彼なりの一貫性を守りなが

らも歐化推進から逆の立場に移るし、他にも陳望道が議論の重點を歐化語法から「大衆」の語法へと變えるのである。[50] 尙、付言しておくと、歷史的な經過はそう單純ではない。歐化から非あるいは反歐化へ、という流れと步調をそろえて蔓延していく「大衆化」型論理を敢然と退け、三〇年代以降なお歐化論を堅持する例も、魯迅、歐陽山、胡風など決して少數とは言えないし、また、二〇年代には白話の歐化に批判的であったらしい朱光潛が、四〇年代に《文學與語文（下）——文言白話與歐化》という文章を書いて、詳細な論述の果てに「長らく進められてきた歐化運動は、必ず繼續して進めなければならないと思う」とまとめているような例もある。[51][52]

注(1) 《小說月報》第一二卷第一二號〝通信〟欄他。尙、日本語化は「歐化」に含まれるのかどうかという問いも、當時の歐化論者にとって本質的な問題でなかったことは言うまでもない。

(2) 「歐化」を語學分析的に考察したものは少なくない。單行本に、Cornelius C. Kubler "A Study of Europeanized Grammar in Modern Written Chinese"〔一九八五年〕がある他、王力《中國現代語法》〔一九四四年〕の第六章《歐化的語法》、大原信一「五四白話文と歐化語法」〔東洋研究（大東文化大學東洋研究所）九〇、九四～／一九八九年～〕など多數。

(3) 一九三一年一〇月二五日執筆。以下〈三一一〇二五〉と省略する。〔文學半月刊一＝一／三二年四月二五日發表。以下三二〇四二五〕と省略する。一九八五年版《瞿秋白文集・文學篇》第一卷（以下《瞿秋白文集一》の如く省略する）他所收。

(4) 〈三二〇三〇五〉〔文學月報創刊號／三二〇六一〇〕《瞿秋白文集三》他所收。

(5) 〈三二〇六二〇〉〔文學月報一＝二／三二〇七一〇〕《瞿秋白文集一》他所收。

(6) 〈三二〇五〇五〉〔當時未發表〕《瞿秋白文集一》他所收。

(7) 〈三二〇五三〇〉〔當時未發表〕《瞿秋白文集三》他所收。

(8) 瞿秋白往信〈三一一二〇五〉〔十字街頭一、二／三一一二一一、二五〕魯迅返信〈三一一二二八〉〔文學月報一＝一／三二〇六一〇〕及び前掲注(5)の瞿秋白返信。

(9) 前掲注(2)のC. Kubler著書は、第一章第三節"Brief History of Western Language Influence on Chinese"の中で、瞿秋白を魯迅とともに白話歐化推進論の急先鋒とする。逆に、新村徹「「大衆語」覺書——三〇年代の文藝大衆化・大衆語論爭をめぐって——」〔中國文學論叢（櫻美林大學）六／一九七六年〕は「歐化を受容してもよいと考えた魯迅（さらに陶行知）の文體に歐化が認め難いのに對し、歐化句法に反對した瞿秋白、茅盾などの文體がむしろ歐化を受け入れていることは、興味ある對比である。」とする。いずれも一面的な指摘と言えよう。他に瞿秋白の反「歐化」論一般に關してはP.G. Pickowiczk "Marxist Literary Thought in China—The Influence of Ch'u ch'iu-pai."〔一九八一年〕第六章"〈Europeanization〉and the Literary Left"參照。

(10) 前田利昭「瞿秋白と左連——「第三次文學革命」と「文藝大衆化」に關する主張を中心として——」〔東洋文化五二／一九七二年〕は、瞿秋白の「文藝大衆化」論の中の多くの重要な論點が「廣範な共感を得られなかった」ことを指摘しているが、同時に、「聞いてわかる」か否かといった「ことばの問題」だけは例外であったことを示唆している。

(11) 例えば、周文（稻子）《拈一點蛆虫給大家看看》〔大晚報・火炬／三四〇七〇四《大衆語文論戰》所收〕、胡風（高荒）《怎樣前進一步》〔三四〇七二八〕〔《大衆語文論戰續一》他所收〕、茅盾（仲元）《白話文的洗淸和充實》〔申報自由談／三四〇八二〇《大衆語文論戰續二》他所收〕。

(12) 〔文學一＝三／三三〇九〇一〕
(13) 新兄宛書簡〔《瞿秋白文集三》他所收〕。
(14) 〔申報・自由談／三四〇八一四〕
(15) 〔申報・自由談／三四〇七二五〕十六卷本《魯迅全集》第五卷他所收。
(16) 文祗（文公直）《中國語法需要歐化嗎》〔申報・自由談／三四〇八〇七〕魯迅（康伯度）《康伯度答文公直》〔同上〕。
(17) 〔申報・自由談／三四〇九〇七〕十六卷本《魯迅全集》第六卷他所收。
(18) 〔山西黨訊副刊／三四〇九〇七〕《趙樹理文集》第四卷・付錄部分所收。《西廂記》の引用は第二章《歐化是否必要——責龍貢公》。歐陽山（龍貢公）《文學用語歐化有必要》〔申報・自由談／三四〇八一四〕を直接反駁の對象としている。
(19) 注(16)參照。陳子展の《文言——白話——大衆語》〔申報・自由談／三四〇六一八〕は三四年の「大衆語論爭」の口火を切ったとされる。
(20) 〔北京文藝二＝三／五一〇五一〇〕
(21) 〔重慶・新民報／四四〇五二〇～二二〕《張恨水研究資料》所收。
(22) 〔文學月報一＝二／三二〇七一〇〕《文藝大衆化問題討論資料》他所收。
(23) 〔當時未發表〕《你我》他所收。
(24) 瞿秋白の文章は注(4)、茅盾のは注(22)參照。陽翰笙のは（寒生）《文藝大衆化與大衆文藝》〔北斗二＝三・四／三二〇七二〇〕
(25) 「穆時英」と「張天翼」は、瞿秋白が注(3)の《普洛大衆文藝的現實問題》の中で「積極的に俗語を主張」した時に、注目すべき作家としてすでに擧げている。杉本達夫「「俗語」と「新文語」——文藝大衆化論議の一側面——」〔中國古典研究二〇／一九七五年〕はその點に着目している。ただし、朱自清には觸れていない。
(26) 二人が時期こそ違え、「朗誦」（あるいは「誦讀」、「朗讀」）運動を主張・推奬したのも偶然ではない。例えば瞿秋白（董龍）《啞吧文學》（三一〇八一五）〔北斗創刊號／三二〇九二〇〕《瞿秋白文集一》他所收。朱自清《論朗讀》〔國文雜誌一＝三／四二——〕、《誦讀教學》〔北平・新生報副刊・語言與文學／四六一二〇二〕、《誦讀教學與「文學的國語」》〔北平・新生報副刊・語言與文學／四六一二一六〕、《論誦讀》〔天津・大公報・星期文藝／四七〇二〇九〕以上《標準與尺度》他所收。
(27) 朱自清自身は語文の「近代化」としての白話「歐化」に理解を示している。歐化文がもたらした精緻な近代的表現をはっきり評價したこともある。《說話》〔小說月報二〇＝六／二九〇六一〇〕他參照。
(28) 朱自清の「民衆」あるいは「大衆」と「文學」の關係に對する見方については、李關元《試論朱自清的文藝思想》〔江海學刊／一九八八年五期〕、松浦恒雄「朱自清と白話文」〔未明七／一九八八年〕、および、巨視的には唐弢《論作家與群衆結合》（一九六一年）〔《西方影響與民族風格》所收〕、劉再復《「五四」文學啓蒙的失落與回歸》〔文藝報／一九八九年一六、七期〕參照。ただし、それぞれ見解を著しく異にする箇所がある。
(29) 注(27)參照。左翼系の語文論に關心を寄せていたことを示す部分が削除・改定されて文集《語文影》に收められる。末尾に執筆年を一九二九年ではなく三五年とするが、これは手を加えた年のことか。
(30) （二八一二〇四）《你我》他所收。
(31) （三二〇——）〔東方雜誌三〇＝一／三三〇一〇一〕《你我》他所收。《你我・序》（三四一二——）參照。尙、朗讀に關しては前揭注(26)《論朗讀》參照。
(32) 《文言白話雜論》〔清華週報四二＝三・四／三四一一一二〕《朱自清論語文敎育》他所收。《論朗讀》以下は注(26)參照。
(33) 例えば李宗武（語體文歐化討論(3)所載の編者宛書簡）〔小說月報一二＝九／二一〇九一〇〕、夏丏尊《先使白話文成話》〔申報・自由談／三四〇六二七〕《大衆語文論戰》他所收、など。

(34) (一八一三六)〔新潮一＝二／一九〇二〇一〕《中國新文學大系・建設理論集》他所收。

(35) 朱光潛（明石）《「雨天的書」》〔一般一＝三／二六一一〇五〕陶明志編《周作人論》所收。劉半農《「中國文法通論」第四版付言》(二三一〇二二)。

(36) 〔三一〇九——單行本出版〕尙、この講演に對する總合的な論評として注目されるものに、錢鍾書（中書君）《評周作人的「中國新文學的源流」》〔新月四＝四／三二一〇一〕(《周作人論》所收)、竹內好「現代中國文學の特質」〔支那二八＝四／三七〇四——〕(「竹內好全集」第一四卷所收)、木山英雄「周作人——思想と文章」〔一九六七年〕(「近代中國の思想と文學」所收)、David E. Pollard "A Chinese Look at Literature—The Literary Values of Chou Tsuo-jen in Relation to the Tradition"〔一九七三年〕(單行本)、錢理群《周作人傳》〔一九九〇年〕の第七章第四節《「中國新文學的源流」》等がある。

(37) 朱自清《詩言志辯》〔一九四七年〕は、「言志」の意味內容の變遷を追い、近代に入って周作人が「言志」を「抒情」とか「卽興」に近い意味で使って一世を風靡するまでを論述している。尙、「言志／載道」二項對立圖式の前史については、拙稿「周作人とスウィフト〈育嬰芻議〉——その飜譯に關連して」〔猫頭鷹六／一九八七年〕の「はじめに」、及び「若子の死の周邊——周作人・一九二〇年代から三〇年代へ」〔季刊中國一九／一九八九年〕の「おわりに」參照。

(38) 諸葛亮《梁父吟》中の一句。典據となったのは、春秋時代の齊の晏嬰が二個の桃を使って三人の豪傑を自盡に追い込んだという《晏氏春秋》中の話。章士釗《評新文化運動》〔新聞報／二三〇八二一～二二〕が、この句を例にあげ、もとの文言の一句と直譯した白話とを比較して、文言の白話に對する優位を說いたことがある。

(39) 〔晨報副刊／二二〇二二二〕《自己的園地》他所收。

(40) 〔國語月刊一〇／二三二一二〇〕《藝術與生活》他所收。

(41) (二五一二二五)〔京報副刊／二六〇一二四〕《藝術與生活》他所收。

(42) 〔小說月報一二＝六／二一〇六一〇〕

(43) この論議に詳しく觸れたものに大河內康憲「白話による初期の飜譯文體について」〔中國語學一一八／一九六二年〕などがある。

(44) 〔時事新報・文學旬刊七／二一〇七一〇〕

(45) 《小說月報》第一二卷第九號〝通信〟欄。

(46) 梁生爲（梁繩袿）編者宛書簡〔小說月報一三＝一（通信欄）／二二〇一一〇〕。

(47) 前揭注（22）《問題中的大衆文藝》。

(48) (二八一一二二)〔「燕知草」所收〕《永日集》他所收。

(49) 《中國新文學的源流》第五講他參照。

(50) 《語體文歐化之我觀》〔民國日報・覺悟／二一〇六一六〕と《關於大衆語文學的建設》〔申報・自由談／三四〇六一九〕を比較してみるといい。いずれも《陳望道文集》第三卷所收。

(51) 歐陽山は、《再進一步》〔中華日報副刊・動向／三四〇六二五〕（陳望道《大衆語論》(《文藝大衆化問題討論資料》他所收）第五章引用部分による)、前揭注（18）同《文學用語歐化有必要》他參照。胡風は、《「白話」和「大衆語」的界限》(三四〇七一九)〔中華日報副刊・動向／三四？〕(《胡風評論集》上卷他所收)、《論民族形式問題》〔一九四〇年〕第八章《通過語言問題——文字改造和大衆的人民文藝底發展》(《胡風評論集》中卷他所收）他參照。

(52) 「歐化」に對する批判は前揭注（35）《「雨天的書」》に見える。《文學與語文（下）——文言白話與歐化》は《談文學》〔一九四六年出版〕他所收。

＊尙、魯迅・周作人の語文觀全般に關して、木山英雄「文語から口語へ——中國文學の一斷面」〔言語三＝八／一九七四年〕、「語文問題と

周作人」〔漢文教室二一一／一九七四年〕から多大の御教示を得た。

＊本稿は日本中國學會第四二回大會（一九九〇年一〇月於駒澤大學）での口頭發表を改稿したものである。